

2020年9月13日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

列王記上 19 : 19～21

ルカによる福音書 9 : 57～62

「イエスさまに従うとは」

<三人のひととイエスさま>

今日の所には、イエスさまに従おうとする三人のひとが出て来ます。私たちもまた、イエスさまの救いを信じるなら、イエスさまに従う者となります。イエスさまに従うとはどういうことか、いったい何が求められているのか。今日はそのことが語られています。

しかし、ちょっと読むと、これはだいぶ難しいことを言われているな、と感じるのではないのでしょうか。

一人目の人は「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります。」と言いました。自らイエスさまに従います、と言い出した。しかも、あなたが行くところならどこへでも必ず従って行きます、と決意を言い表したのです。大した覚悟です。

しかし、イエスさまはこの人に言われました。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕するところもない。」動物にさえねぐらがあるのに、イエスさまには安心して眠るところさえない。わたしが行く所とは、そのようなところだ、と仰ったのです。

二人目の人は、イエスさまから「わたしに従いなさい。」と声をかけられました。だからこの人はその招きに応じて従おうとしたのです。しかし、どうしても先にしなければならないことがありました。「主よ、まず、父を葬りに行かせてください。」父親を葬るということは、ユダヤ人の最も大切な義務でした。父の葬りのためなら、他の律法を守れないことがあっても構わない、とされていた程です。何にも優先されて、なすべきことでした。だから、それが終わったら、あなたに従います、と。

しかし、イエスさまは言われました。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」父を葬るのは他の者にさせて、父の葬りにもまして、何より優先して、あなたは行って、神の国を言い広めなさい、と言われたのです。

三人目の人は、一人目と二人目を足して割ったような感じですか。この人は一人目のように、自らイエスさまに従うと言い出しました。「主よ、あなたに従います。」しかし、その前にやることがあるので、それが終わってからにして下さい、と言ったのです。それは、家族にとまごいをする事、お別れの挨拶をすることでした。イエスさまに従うために、愛する家族と離れて、もうしばらく帰ってこない、というつもりだったのでしょう。だから、ちゃんと挨拶をしたい。

しかし、イエスさまは言われました。「鋤に手をかけて後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。」もう仕事が始まっているのに、他のことに気を取られている、別のことに未練がある、それは神の国の働きをするのにふさわしくない、と言うのです。

今日の聖書箇所の小見出しのところには、「弟子の覚悟」とあります。これは、聖書の原文に書かれている言葉ではありません。翻訳の時に、内容が分かりやすいように後から付けられたものです。そして、「弟子の覚悟」と言われてこれを読むと、これは相当な覚悟をしなくちゃいけない、と思わされます。イエスさまに従うためには、枕するところ、安心して眠れるところさえない生活を覚悟しなければならない。親が亡くなっても、お葬式をすることも出来ない。家族にお別れを言うことさえ許されない。そんな暇があったら伝道しろ、と言われていたのでしょうか。さあさあ、あなたにこの覚悟はあるか。わたしに従えるか。そんな風に迫られているのでしょうか。

もしそうなら、きっと誰もイエスさまに従う覚悟を持つ、なんてことは出来ません。

もしかしたら、わたしはそういう覚悟で従っている！という方がいらっしゃるのでしょうか。しかし、それは本当でしょうか。自分の覚悟だけで、自分の強い意志で、これまでイエスさまに従ってきたのでしょうか。

<イエスさまが求めておられること>

わたしたちはもう一度、ここで言われていることを丁寧に見つめたいと思います。

一人目の人は、イエスさまが行かれるところなら、どこへでも従っていくと言いました。では、イエスさまが向かっておられるのはどこでしょうか。エルサレムです。エルサレムへ行かれるのは何のためでしょうか。それは、天に上げられる時期が近づいたから。多くの苦しみを受け、人々に排斥され、殺され、十字架に架けられる時が近づいたからです。

救い主として来て下さった神の御子イエスさまの歩みは、世に受け入れられず、人々から見捨てられ、排斥され、殺される。そうして世のすべての人の罪を担い、すべての人の滅びの死を担ってゆかれる。その苦しみと死の果てに、復活の栄光を受けられる。そのような歩みです。神さまに遣わされたイエスさまは、お生まれになったその時から、宿もなく馬小屋の飼い葉桶に寝かされました。初めから最後まで世に受け入れられない、そのような歩み。

イエスさまに従っていくとは、このイエスさまの御跡を行くということです。神さまに背く者のために、ご自分に敵対する者のために、それらの者を救うために、苦しみと罪の重荷と十字架の死を受け入れ、担って歩んで行かれる。この方に従うことなのです。

それは、従う者もまた、主と共に敵対され、受け入れられず、迫害される、そのような歩みです。しかしそれは、世における安心、自分で手にできる平安ではなくて、神さまの救いによる安心、神さまと共にあるまことの平安に生きる者となることなのです。

わたしに従うとは、そういうことなのだ。しかも、それは、あなたの決意や、熱心さ、あなたの力によってなせることではないのだ。イエスさまはそう言われたのです。

二人目の人は、イエスさまに従いなさいと招かれましたが、まず父を葬りに行かせて下さいと言った。それは、何にも代えがたい義務であり、当然のことであり、大切なことです。

しかし、イエスさまは、まず神の国を言い広めること。神さまの恵みのご支配を何より見つけて、その恵みに生き、その恵みを語ることを最優先にいなさい、と言われたのです。

父の葬りは、人として優先順位が最も高いこととして語られていると思われませんが、わたしたちは、イエスさまに従う、神さまの御用をする、と言う時に、それよりもひとまずこれをしなければならない、まずこれだけは片付けてから精一杯仕えよう、と思っていることが、案外多いのではないのでしょうか。自分の中の優先順位、世の中で大切とされていること、社会や家庭での役割、負っている責任。実は、そういったことをイエスさまに従うことよりも優先させていることは多いのではないのでしょうか。

しかし、究極的に、最終的に、わたしたちは何よりもイエスさまに従うことを一番に考えなければならないのです。それは、葬りの業や、負っている責任や義務を蔑ろにしてよい、という意味ではありません。しかし、葬りにしても、それは神の国に優先するものではないのです。

なぜなら、神の国とは、死んだ者にも、生きている者にも、命を与える、復活を約束する、神さまの命のご支配のことだからです。罪を赦し、死に打ち勝ち、永遠の神さまの命にあずかせて下さる、その救いの恵みの知らせだからです。

この父の葬りに関して言えば、まずこの神の国にこそ、愛する大切な人を亡くした人を、本当に慰め、励まし、希望を与えることができる神の力があるのです。葬りは人の手の業です。しかし、それにもまして神の国が告げ知らされる。イエスさまの罪の赦しと復活の恵みの約束が告げ知らされる。そこにこそ、死に打ち勝つまことの慰めがあります。人は、神の国にあってこそ、希望と慰めに満ちた、まことの葬りをなすことができるのです。

三人目の人は、自らイエスさまに従います、と述べておいて、条件をつけました。家族にいとまごいをさせて下さい。家族にお別れを言わせて下さい。

このやりとりは、当時のユダヤ人であればすぐに、今日お読みした旧約聖書の、エリヤとエリシャの話の思い出します。エリヤが、畑を耕しているエリシャを、弟子に招いた。エリシャは両親にいとまごいをするを願い、それからエリヤに従ったというお話です。だからイエスさまも、エリシャが畑にいたことから、鋤をたとえに出してお答えになりました。

しかし、イエスさまのお答えはこうです。「鋤に手をかけて後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。」これから神の国を告げ広めよう、イエスさまに従って行こう、もうその歩みを始めようとしているのに、他のことに気を取られている。自分の気持ち、家族の気持ち、大事な人とのことをまずちゃんとして、それから従って行こう。それは、神の国の働きに仕えるのにふさわしくない。準備が整っていない。そう言われたのです。

これもまた、家族や、大事な人々との関係はどうでもよい、捨て去りなさい、ということではありません。でも、あなたの大切にしている人間関係を、自分なりに整理して、自分が納得して、心を落ち着けて、それからイエスさまに従いましょう、と条件を付けるのは、ふさわしくない、と言われるのです。まず、神の国、イエスさまに従うことこそ、何を置いて

でも一番になすべきことなのです。

<何よりもイエスさまに従うこと>

イエスさまは、天から降られ、神の御子の身分を捨てられること。世に受け入れられず、苦しみを受けること。神に敵対する罪人のために、わたしたちのために、十字架の死への道を歩んでいかれること。このことを受け入れ、決意して下さいました。

この方に従うとは、この方の十字架と復活の救いの恵みに生かされて歩むということです。罪に苦しみ、愛が冷え、滅びへと向かっていたわたしたちが、このイエスさまによって、罪の苦しみ、死の縄目、悪の支配から脱出させていただく。渇きを潤され、空腹を満たされ、救いの恵みに生かされるということです。

イエスさまが、このわたしが与える救いを受け取りなさい。苦しみと罪と死の中から、この恵みの支配の中に入ってきなさい。わたしに従いなさい。そう招いて下さっているのに、わたしたちは、自分の覚悟を宣言してみたり、自分の都合や、世の中の義務や、人間関係のことを考えて、条件をつけて、自分なりに何とかしてから従って行こうしている。結局、他のことを優先して、まず自分で条件をクリアすれば従って行けると思っているのです。しかし、イエスさまに従うことは、そんな悠長なことではないのです。

わたしたちは今すぐ、この方の御手に罪の自分を委ね、この方の十字架に自分の死を担っていただき、この方の復活の命をいただかなければならないのです。

今すぐに、全てをイエスさまに預けて、すべてを担っていただいて、わたしたちはこの方と共に歩み出すべきなのです。

これは、決して自分の決意や努力による歩みではありません。イエスさまが担って下さったわたしの罪、わたしの死、イエスさまが与えて下さる永遠の命、復活の約束、恵みのすべて、それを受けてこそ、わたしたちは立ち上がり、神さまを見つめ、イエスさまと共に歩んでいくことが出来るのです。従うことが出来るのです。

そして、この方にすべてをお委ねするとは、わたしたちの生活のこと、愛する人を失う悲しみのこと、愛する家族のこと、わたしにまつわる全てのこともまた、イエスさまにお委ねするということです。イエスさまは、神のご支配のもとで、必ず、わたしたちの必要を満たして下さいます。安らぎを与え、生活を守り、悲しみを慰め、命を与え、隣人との良い関係を築かせて下さいます。

ですから、今日の箇所をそのまま読んで、律法のように用いてはいけません。教会のことがあなたの安心した生活より大切だ。お父さんの葬式より優先だ。家族のことは捨ててこい。そんなことを教えているのではないのです。そんな覚悟を求めているのではないのです。

むしろ、イエスさまこそ、わたしたちのために御自分の命を捨てる覚悟をして下さった。わたしたちの命を、すべてを担う決意をして下さった。

この救いの恵みにこそ、神の国にこそ、イエスさまの許にこそ、わたしたちはまず立つべ

きだ、ということなのです。

いふなれば、わたしたちの覚悟は、決心や、頑張ることや、努力すること、我慢することを覚悟するのではなく、イエスさまにすべてをお委ねする、その覚悟と言っても良いかも知れません。

心配なこと、気にかかること、自分なりに大切なこと、背負っていること、わたしたちは色々なことを抱えています。しかしわたしたちは、自分の思い、自分の優先順位、自分の常識を置いて、何よりもまず神の国を求めること。イエスさまの救いの恵みに与ること。イエスさまに従っていくことを第一のこととしたいのです。

イエスさまの救いの恵みという土台に立っているからこそ、イエスさまが共に歩んでくださると知っているからこそ、わたしたちは、日々の生活や、人間関係や、人生のあらゆること、命の生死のことにも、ちゃんと向き合っていくことが出来るのです。

イエスさまに従うことは、これまでの生き方とは違う新しい生き方を知ることです。人生の主人が、自分ではなく神さまであると知ること。自分の命が、自分のものではなく神さまのものであると知ること。自分が持っているものが、自分の所有物ではなく神さまから与えられたものであると知ること。すべてを与え、守り、導いて下さるイエスさまが、すべてを担って下さり、すべて面倒を見て下さり、終わりの日まで共に歩んで下さるといふこと。

それが、イエスさまの救いを受け入れ、信じることであり、イエスさまに従うことであり、わたしたちが一番になすべき歩み、招かれている歩みなのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたが遣わして下さった救い主イエスさまが、わたしたちの罪の赦しのために、苦しみを受け、十字架にかかり、そして復活して下さったのに、わたしたちはその恵みを受け取るのに、勝手に条件をつけ、自分の思いを優先し、他になすべきことがあるかのように思っています。しかし、何より神の国、神のご支配を求めること、イエスさまに従うことが、何よりも大切であり、何よりも大きな恵みであることを、悟らせて下さい。

その恵みに生かされてこそ、わたしたちの日々の生活、家族や隣人とのこと、人生のあらゆること、そして命も、あなたのご支配にあり、必要なものがすべて与えられ、満たされ、慰められることを信じさせて下さい。

このイエスさまに従う歩みに、すべての者が招かれています。どうか、聖霊によって一人でも多くの方に、イエスさまの恵みを受け取り、イエスさまと共に歩む道が拓かれますように。そして、洗礼を受け、イエスさまの体に確かに結ばれているしるし、来たる日の神の国の食卓である聖餐に、共に与る者とならせて下さい。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン